

とある家に少年と少年の愛する犬は暮らしていた。

少年と犬はいつも一緒だった。

少年がお母さんに怒られたとき、犬は少年の側で少年の頬に顔をすりつけて、

沈んだ少年の心を癒した。

休日は少年と犬は外で遊んだ。砂浜でかけっこしたり、公園でボールで遊んだりした。

少年は犬を心から愛してた。ずっとずっと一緒にいられると思っていた。

とある日、少年は言った。

「おかあさん、おかあさん、犬にリボンを買ってあげて！ねえ、買ってあげて。きつとすく似合うと思うんだ。」

「なに言ってるの。犬にリボンなんておかしいじゃない。」

「でもいいじゃない。きつときつと似合うんだよ。赤のリボンがきつと似合うよ。ねえ、お願い。」

「そんなことより、勉強しなさい。将来のために勉強しなさい。一生懸命に勉強したら、いつか、犬にリボンを買ってあげられるから。」

リボンを断られて少年は落ち込んだ。...

次の日、少年が学校から帰ってくると、犬の頭に赤いリボンが付けられていた。

「おかあさん、おかあさん、リボンを買ってくれたんだね！ありがとうおかあさん。」

「リボンなんか買わないじゃない！でも誰がリボンなんか…でも、いいじゃない、似合うんだから。」

「そうだね！すく似合し、可愛いからいいね！」

少年はあまりの嬉しさに犬と歌を歌いながら踊った。

ハレルヤ ハレルヤ♪

ハレルヤ ハレルヤ♪

季節が過ぎて寒くなっても少年はいつも犬と一緒にだった。

おつかいに行くのもいつも一緒だった。留守番をしても少年は犬と歌を歌った。

とある日、少年は言った。

「おかあさん、おかあさん、犬にセーターを買ってあげて！ねえ、買ってあげて。きつとすく似合うと思うんだ。」

「なに言ってるの。犬にセーターなんておかしいじゃない。」

「でもいいじゃない。きつときつと似合うんだよ。白のセーターがきつと似合うよ。ねえ、お願い。」

「そんなことより、勉強しなさい。将来のために勉強しなさい。一生懸命に勉強したら、いつか、犬にセーターを買ってあげられるようになるから。」

セーターを断られて少年は落ち込んだ。

次の日、少年が学校から帰ってくると、犬に白のセーターが着せられていた。

「おかあさん、おかあさん、セーターを買ってくれたんだね！ありがとうございます。」

「セーターなんか買わないじゃない！でも誰がセーターなんか…でも、いいじゃない、似合うんだから。」

「そうだね！すごい似合し、可愛いからいいね！」

少年はあまりの嬉しさに犬と歌を歌いながら踊った

ハレルヤ ハレルヤ♪

ハレルヤ ハレルヤ♪

でも、楽しい日々はそうは続かなかった。犬は病で倒れ、そのまま死んでしまった。

少年は泣いた。一晚中泣いた。犬と過ごした楽しい日々ばかりが頭に浮かんだ。

「会いたい。会いたい。さびしい。さびしい。」

いつの日か少年は笑わなくなった。心配した少年の母親は新しい犬を買おうかと聞いたが、少年は聞こうとしなかった。

毎日、毎日、少年は犬を思い出した。一緒にいた日を思い出しては、犬と歌った歌を思い出した。

ハレルヤ ハレルヤ♪

ハレルヤ ハレルヤ♪

月日が流れても少年は犬を忘れることが出来なかった。

「会いたい。会いたい。さびしい。さびしい。」

少年は犬にどうしても会いたかった…会いたかった。

どうしても犬に会いたかったから、どうすればまた、犬に出会えるのかと、少年は毎日勉強した。くる日もくる日も勉強した。

やがて、少年の頭もまったく白くなって、顔もしわだらけになっても少年は勉強を続けた。

少年が眼鏡をかけないとろくに目も見えないくらいになったとき、それは誕生した。

“タイムマシン”

少年はどうしても犬に会いたかったから、なんと、タイムマシンを作ってしまったのである。少年はこのタイムマシンが完成したのを誰にも教えず、少年のタイムマシンの使い道は決まっていた。

もう一度、犬に会うために、犬に会うために何十年も勉強して作った。しかし、タイムマシンを使うには、少年はすっかり年をとってしまった。それでも少年はタイムマシンに乗って犬に会いに行く決めていた。

タイムマシンに乗る日が来たとき、少年は自分が来た印に犬にプレゼントを持っていった。

そして、あの懐かしい家に着いた。

少年は犬に自分が判ってくれるか心配だった。

しかし、犬は少年のことがわかっていて、少年に飛びつくや否や少年の頬に犬の顔をすりつけた。少年は嬉しかった。犬と再会できて本当に嬉しかった。

しかし、またタイムマシンに乗って帰らなければいけない時間が来た。少年は犬に自分が来た印に、赤のリボンを犬の頭につけて帰っていった……また、会いに来ると約束して。

そして、再びタイムマシンに乗る日が来たとき、少年は自分が来た印に犬にプレゼントを持っていった。

そして、あの懐かしい寒かった家に着いた。

犬は少年と判り、体を温めようと少年にくっついてきた。少年は嬉しかった。犬と再び再会できて嬉しかった。

しかし、またタイムマシンに乗って帰らなければいけない時間が来た。少年は犬に自分が来た印に白のセーターを着せて帰っていった……また、会いに来ると約束して。

ハレルヤ ハレルヤ♪      ハレルヤ ハレルヤ♪

しかし、少年が再びタイムマシンに乗る日はこなかった。少年の部屋に残されたのは少年と犬との思い出だけだった。